

ルドルフ・シュタイナーの研究成果と
発言の編集および導入
ヴェルナー・シェーファー／ヴァルター・クーグラー
(Heft104)

「蝶の本質について」(1)

ルドルフ・シュタイナーが「蝶」とその本質について、
感動的なまでに美しく宇宙的に語っている連続講義
『創造し、造形し、形成する宇宙言語の協和音としての人間』があるが、
(GA 230/「神秘学遊戯団」のホームページに訳を掲載 (yucca訳))

GAの全集とは別に、シュタイナー関係の記事が編集されている
定期刊行物『ルドルフ・シュタイナー全集への寄稿 (Beiträge)』の
「ノート (Heft) 104」には、
ヴェルナー・シェーファーとヴァルター・クーグラーによる
上記の連続講義やその他でのシュタイナーの
「蝶」に関する研究成果と発言に関する記事が掲載されている。

ヴェルナー・シェーファー (Werner Schäfer) は、
シュタイナーの技術的画像・音声メディア
(フィルム、グラモフォン、ラジオなどの「コミュニケーション機械」)
に対する批判を体系的にまとめた人智学系の著者・研究者。

ヴァルター・クーグラー (Walter Kugler) は、
2003年から2011年まで、スイス・ドルナッハの
ルドルフ・シュタイナー・アーカイヴ (Rudolf Steiner Archiv) の所長を務め、
シュタイナーの遺稿管理や全体著作集の編集に長年関与している。

以下、その両者による記事を取りあげる。

【蝶の本質について】

ヴェルナー・シェーファーとヴァルター・クーグラーによる、
ルドルフ・シュタイナーの研究成果と発言の編集および導入

「あなた自身の頭部が持つ驚異を知るためには、蝶が外なる自然の中でどのように生成していくか、その驚異を研究しなさい。これこそが、霊視的な観察に対して宇宙が与えてくれる偉大なる教えにほかならない。」

1923年10月28日 (GA 230、第6講)

〔大自然の書物を読み解く〕

小宇宙（ミクロコスモス）としての人間と、大宇宙（マクロコスモス）との照応は、ルドルフ・シュタイナーの著作の広範な領域を一本の赤い糸のように貫いている、極めて巨大なモチーフの一つです。

「そうなのです、人間は小宇宙であり、外なる大きな世界の秘密をその内に含んでいます。私たちが、自分自身を内側から見つめているもの、すなわち私たちの思考、私たちの感情、私たちの意志、私たちの記憶の表象というものを、別の側から、つまり外側から、大宇宙の視点で見つめるならば、それを自然界の諸領域のなかに再び見出すことになるのです。」（1923年10月19日、GA 230）

このモチーフが最も包括的に描写されているものの一つが、1923年にドルナッハで行われた連続講義『創造し、造形し、形成する宇宙言語の協和音としての人間』（GA 230）のなかに見出されます。この講義はしばしば「蝶の連続講義」とも呼ばれています。

1972年に、シュタイナーがこの連続講義のために書き残したノートの記録が『Beiträge（寄稿）』（第40号、現在も入手可能）に掲載された際、当時の編集者であったヴォルフラム・グロデックは、これらの講義における「宇宙的な秩序は、最高度の意味において芸術的に形成されている。実にこの連続講義は、その文体と構成において、それ自体で自己完結した一つの芸術作品である」と書きました。この指摘がどれほどの射ているかは、これらの講義に深く取り組み、とりわけ「蝶という存在（Schmetterlingswesen）」についての描写を自らの心に深く作用させるすべての人にとって、十全に理解できるはずです。

一枚の巨大な絵画のように、読者はここで、何層にも織りなされたモチーフに出会うことになります。シュタイナーは、蝶という存在の様々な存在の階層を、その時間的なプロセスと、空間的な並置のなかで解き明かしながら、段階的にその謎を解いていくのです。

たとえば、第4講においては、より高次の天的な影響（太陽と外惑星である上の諸惑星）のもとで発達していく蝶が、地上（地球）の影響のもとで発達していく植物と、いかに完璧な照応関係を持っているかが次のように説明されています。「『葉』とは、地球的な影響のもとにおかれた『イモムシ（Raupe）』にほかならない……『萼（がく）』とは、まさに『サナギ』にほかならない。そして最終的に、花の中で『成虫（蝶）』が展開していくのである……。蝶が自らの卵を産み落とすように、花のなかでは再び、未来へ向けて種子が発達していくのである。」ここからルドルフ・シュタイナーは、私たちが蝶という存在を、まさに「空気の中へと高く引き上げられた植物」として理解することができるのだ、と結論づけているのです。

ルドルフ・シュタイナーの描写において、蝶は自然界の他のどの生き物よりも、人間が「自分自身」についてより多くを知るための鏡として明らかにされています。「あなた自身の頭部の驚異を知るためには、蝶が外なる自然の中でどのように生成していくか、その驚異を研究しなさい……」という言葉がそれを示しています。

さらに、第6講において彼は、人間の魂が肉体へと宿る「受肉のプロセス」に関連して、この連続講義のなかで最も印象的なイメージを聴衆の前に提示しています。

「……精神的なものを探求するなら、そこで初めて、個々の存在の領域蝶という存在と鳥という存在]が一体どのような意味を持っているのか、その真の姿に到達することになる。地球はいわば、蝶のコロナが放つ輝かしいオーラと、鳥のコロナが放つ放射を宇宙空間へと向かって送り出すことによって、人間の魂を受肉へと向けて、内側へと誘い込んでいるのである。」

ここから、蝶という存在について、そして「魂の不滅」の象徴としての蝶にまつわるルドルフ・シュタイナーの発言をまとめたものが公開されるにあたり、次のように反論する人がいるかもしれません。「大自然

における他のさまざまな現象についても、同じような方法で描写し、提示することができるのではないか」と。

その主張に対して、根本から異議を唱えるつもりはありません。しかし、ここで蝶がこれほど特別な方法で「提示」されているのは、ルドルフ・シュタイナーによる蝶の取り扱い方と、その眼差しのなかに、唯一無二の独自性が横たわっているからです。なぜなら、彼の元において、これほど直接的に『人智学そのものに対応する存在』として扱われた自然現象は、蝶のほかに一つもないからです。

あの高貴な「薔薇」でさえ、この特権を自らのものとして主張することはできません。なぜなら、薔薇でさえ、最終的にはその「元型」をまさに蝶という存在の内部に持っているのであり、いわば、蝶の本質が地球という地上のステージへと投影された姿にほかならないからです。

「植物を見つめるがよい！
それは、地球によって鎖で縛りつけられた、
一頭の蝶（Schmetterling）なのだ。」

〔ルドルフ・シュタイナーの著作における「絹の糸」〕

1904年9月30日の講義〔訳註：GA 93（『神殿伝説と黄金伝説』）〕において、ルドルフ・シュタイナーは初めて蝶のモチーフを響かせました。そこでは「イモムシ」のイメージを用いて、「影のような脳の思考（死んだ抽象概念）」と、生命を生み出す「生産的な思考」との決定的な違いが示されました。この観点は、のちに「蝶の連続講義」において再び取り上げられ、さらに詳しく推し進められることになります。

1904年から1905年にかけて、そして1921年以降に再び、自然科学と精神科学を結ぶ架け橋として、蝶の変容のイメージがさまざまな形で立ち現れます。一方で、蝶の持つ意識と、人間の秘教的な意識との間にある種の合致があることは、主に1905年から1906年にかけての初期の講義の中で示唆されていました。

1906年、彼は初めて、蝶とその発達プロセスについて、精神の認識に基づいたあらゆる教育的活動のための「根源的な比喩」として語りました。

「子供が生命や死について、また人間の変容について問いかけてきたとき、イモムシとサナギの例を目の前に提示して見せることができる。サナギの内部から、いかに蝶がいわば『復活』し、新しい生命へと向かって舞い上がるのかを、子供に対してクリアにするのである。」

このイメージを、ルドルフ・シュタイナーはそれ以降の数年間、教育に携わる教師への示唆を常に結びつけながら、その起源、真実の重み、そして現実に即した正しい扱い方を巡って、何度も繰り返し新しく解き明かしていきました。

「羽を形づくる力」は、1907年以降、ルドルフ・シュタイナーの建築思想の根底をなす、極めて本質的な形成原理でした。このモチーフは、最初の神秘劇における『太陽の神殿』の舞台背景の構成のなかにも、その暗示を見出すことができます。ヒルデ・ボース＝ハンブルガーの回想によれば、ルドルフ・シュタイナーが1909年に自ら実現した「マルシュの模型建築（金色の柱と、上部が開いたドームを持つ建築）」が、彼の指示に従ってここに描写されていました。そのドームの精妙なエーテル天界の青色のなかには、花々の周りを乱舞する数々の「蝶」が描き込まれていたのです。

ルドルフ・シュタイナーが1923年に、太古のケルトのイニシエーションの原理として描写した事象——すなわち、巨石を配置することによって感覚的な地上の光を遮断し、その『闇』の内部において、文化を豊かに肥沃にする『霊的太陽』のインスピレーションを受け取るという原理——は、シュタイナー自身の建築

(第一・第二ゲーテアナムなど)にも完全に当てはまります。それらの建築は、まさに「蝶のサナギの環境(繭の内部)」と完璧に比較することができるのです。その暗闇のなかにおいて、あらゆる感覚的なもの、あらゆる幻影は一度崩壊し、その上で実質変化を遂げ、より高次のステージにおいて「精神の水と神の火から再び生まれ変わり、輝かしく復活するのです。

(同じ年(1909年)、デュッセルドルフで行われた『霊的ヒエラルキーと物理世界へのその反映』(GA 110)の連続講義において、初めて蝶の変容が、宇宙の創造のドラマを映し出す真実の像として引き合いに出されました。その1年後、オスロで行われた『民族魂の使命』(GA 121)においては、1909年に「古土星紀」の創造原理として描写されたあのまったく同じ繭の形成プロセスが、本来の地球の肉体化の真の始まりとして描写されたのです。)

これとほぼ同時期に、蝶の変容が持つ教育的、かつ同時にイニシエーション科学の側面が、最初の神秘劇の第3場〔訳註：第1稿(Erste Niederschrift)〕におけるリーリエの(子供への)言葉として、美しい「詩」の形へと芸術的に結晶化されました。

ご覧なさい、幾度も繰り返し、
これら四つの絵がどのように移り変わるかを。
そうすれば、あなたはまだ私に向かって
数多くの言葉を語りたくなるはず、
これらの絵があなたに告げる言葉を。

どれほど限りなく深く、子供のなかに眠っていることか、
あなた方の言葉が解き明かす、世界の根源の種子が。
私は私たちの友(画家)に、
あの昆虫の生成を
意味深い絵として描かせました。

卵から、イモムシ、そして蛹を経て
蝶に至るまでの、あの神秘に満ちた生命が
連続する形として描かれています。

子供のように純真なこれらの絵のなかに、
いま生き生きと、若い魂が
私に対して自らをすべて明かしてくれました。

そこには、完全な理解へと至る種子があります。
人間の自我が、いかに
大宇宙の鏡を内側に抱き、
そして、いかに霊の体を
自らの内に秘め、そして解き放つのかを。

そして、この霊の体が
いかに自らを紡いでエーテルの形となり、
太陽の光り輝く力のもとで、
この地上のからだへと向かって
自らを開いていくのかを。

(ルドルフ・シュタイナー『4つの神秘劇のための草稿、断片、および拾遺』GA 44より)

人間の受肉のプロセスの個々の段階は、ここではまさに、蝶の生成における4つの段階へと精密に投影されており、芸術家（画家）であるトマシウスに対して、これら4つの段階を絵に描くようにという指示へと結びつけられています。

ルドルフ・シュタイナーの芸術的な構成のなかで、最初の神秘劇の該当するシーンにおいては、何層にも織りなされ、同時に深く互いに関連付けられた出来事が知覚可能となります。精神の教師であるベネディクトゥスが指示を与え、弟子であり画家であるトマシウスがそれを実行し、子供はその絵を定期的に眺めることとなります。そして、高進した弟子であり、まだ7歳に達していないであろうその子供の育ての親でもあるマリアは、子供がその4つの絵のなかに何を体験したかを語らせ、ここから受肉の秘密をより深く認識することを学ぶ、という任務を担っているのです。

この関連において指摘しておかなければならないのは、ルドルフ・シュタイナーは、すでに学校に上がる年齢（就学前・就学期）に達した子供たちに対しては、蝶の変容のイメージを、主に「生命から死への移行（死と復活）」とのつながりにおいて引き合いに出すのに対し、より小さな子供たちや、若者、そして成人に対しては、どちらかといえば「出生前（天界から地上へ降りてくること）の側面」を強調している、という事実です。

第一次世界大戦中に自然科学館で行われた数々の講義から、1923年に至るまでの間、蝶のイメージは極めて多種多様なつながりのなかで常に繰り返し立ち現れます。たとえば、ゴルゴダの秘儀について、科学的な実験について、あるいは一年の周期の巡り（季節の呼吸）について語る際などがそれです。

そのなかで、ルドルフ・シュタイナーが最終的に常に目指していたのは、人間という存在の本質を包括的に理解するために、蝶という存在が持っている「より深い精神的な意味」を指し示すことにほかならなかったという事実は、あのいわゆる「蝶の連続講義」において、あまりにも明瞭に示されています。彼はそれに先立つ数々の講義においても、すでにその個々の側面を響かせていました。たとえば、1921年7月16日の講義における次のような言葉は、蝶の存在の本当の意味を実に見事に表現しています。〔訳註：GA 205『人間の生成、宇宙魂、そして宇宙霊』〕

「皆さんが、あたりを乱舞している昆虫たちを目にし、それらをイマジネーション（高次直観）の力によって捉えるなら、皆さんはそのなかに、自分自身の『自我』がその内部で生きている、あの世界の生きた姿を手に入れることになるのです。……私たちは、鳥の身体の中にあの『羽毛』のなかに組み込まれているもの、そして、蝶のなかに、あるいはそもそも昆虫たちのなかに宿ってあたりをひらひらと飛び回っているあの事象のなかに、自分自身の『自我』を伴って、私たち自身の宇宙的な運動に対する知覚と、その運動への直接の参入を、今まさにリアルタイムに共体験しているのです。」

◎ルドルフ・シュタイナー（yucca訳）

『創造し、造形し、形成する宇宙言語の協和音としての人間』（GA 230）

「神秘学遊戯団」のホームページからpdfをダウンロードできます。

<https://r5.quicca.com/~steiner/novalisnova/steiner/pdf/zusammenklang.pdf>

「蝶の本質について」(2)

●蝶の本質に関するルドルフ・シュタイナーの発言

〈1904年〉

【イモムシ —— 思考】

9月30日

「単なる影のような脳の思考にすぎない思考によっては、何一つ（本物の創造を）行うことはできません。世界のものごとを構築し、組み立てていく創造的な思考、すなわち生産的で実り豊かな思考のもとにおいてこそ、私たちは受動的な思考の代わりに、霊的な力によって貫かれた思考を手に入れることになるのです。

中身をくり抜いて乾燥させたイモムシは、ただのイモムシの『抜け殻』にすぎません。しかし、そこに生きた思考が貫かれるとき、それは『生きている本物のイモムシ』となります。この抜け殻としての思考の内部へと、たしかに働く、創造的な力が注ぎ込まれるのです。それによって（太古の）司祭は、単に世界を外側から眺めるだけでなく、一人の魔術師として世界の内部において力強く作用することが可能になったのです。」

（全集第93巻『神殿伝説と黄金伝説』）

【本能 —— サナギ化 —— 遺伝】

10月20日

サナギ化（繭の形成）のプロセスは、生命の内部には「一度きりしか起こらない不可逆的なプロセス」が存在していることの完璧な証明であり、単に（親から子へと地続きに遺伝子が引き継がれるという）あの片面的な遺伝の観察（唯物論的な遺伝論）を根底から見事に反証するものである。

（全集第53巻『人間の起源と目標』）

〈1905年〉

【蝶の色彩】

3月9日

「近代において、自然科学的な実験が行われました。通常では生きられないような温度環境のなかで、蝶を羽化させたのです。その結果、蝶の色彩や、その色の色調が完全に変化してしまうことが発見されました。さらに高い温度のもとでは、いっそう巨大な変化が観察されるのです。現代の自然科学は、すでに一種の『初歩的な神智学（アントロポゾフィーの先駆）』と化しています。」

（全集第53巻『人間の起源と目標』2）

【アストラル界における夜の蝶（蛾）の意識】

9月28日

「特定の動物の種は、アストラル界における意識を持っています。このアストラル界とは、いわゆる（地上の知性を完全に喪失した）『高次の忘我の意識』の階層でもあります。ヘレナ・ペトロヴナ・ブラヴァツキーは、とりわけインドの夜の昆虫たち、すなわち『夜の蝶（蛾）』について、その事実を特に明確に指し示しています。」

（全集第93a巻『秘教の基本要素』）

〈1906年〉

【蝶と愛の引き合う力】

5月27日

「愛の引き合う力（Anziehungskraft der Liebe）というものは、これほどまでに強力で、神秘に満ちた事実（ファクト）なのです。

たとえば、熱帯産の、ある一对の雌雄の蝶を熱帯地方からヨーロッパへと運び、互いを200マイル（約320キロメートル）も遠く離れた場所に引き離しておいたとします。ところが、彼らを同時に空中へと解放した途端、その瞬間に彼らは互いを目指してまっすぐに飛び始め、ちょうどその中間の場所で見事に巡り会ったのです。

これと全く同じ性質の事象が、人間の世界と神々の世界との間において、あるいは、人間界と植物界との間において、厳然として引き起こされているのです。」

（全集第94巻『宇宙創成論』）

〈1907年〉

【人間の空気状態のヒエログリフ（象徴）としての蝶】

9月14日

「（太古の宇宙進化において）人間の肉体が魂によっていかに発達させられてきたかという描写ののちに、次のように語られます。『その諸形態は次々と移り変わっていった。そして人間の魂は、他の3つの状態（周期）を生き終えたのち、再び最初の形態へと戻ってきたとき、自らが新しく肉体化（受肉）したのを感じたのである。

皆さんは、この太古の発達プロセスが、四つの形態へと変容する現在の蝶のなかに、そのまま保存（残留）されているのを目にする。すなわち、卵、イモムシ（イモムシ）、蛹（サナギ）、蝶である。

蝶とは、かつての「古き太陽周期（アルテ・ゾンネ）」において人間がまもっていた**「空気状態（ルフトツースタント）」のヒエログリフ（神聖文字）であり、その生きた兆候（サイン）**にほかならない。全く異なる環境のもとで生きている現代の今日の蝶は、もちろん、当時のそれらの輝かしい状態からすれば、ある種の退化（デカダンス）した形態ではある。しかし、蝶は、人間がすでにその段階を通り抜けて超克してきた、あの太古の空気状態を映し出す真のシンボル（象徴物）なのである。

それゆえにこそ、オカルティズム（神秘科学）の内部において、蛇が「地球の生物」、魚が「水の生物」と呼ばれるのと全く同じように、**蝶は『空気の生物（ルフトヴェーゼン）』**と定義されているのである。』」全集第101巻『神話と伝承。オカルトの兆候とシンボル』167ページ

【「蝶のように舞い飛ぶ」諸存在】

12月4日

「人間の肉体組織の内部にある数多くのものが、植物的な性質を持っています。そして、これらすべての植物的なものの内部へと、『第二元素霊』の精霊たちが力強く作用し合っているのです。……この第二元素霊の王国から働きかけ、植物をその生命のカタチへと向かって勢いよく成長させているあの精妙なエレメンタル存在たちは、まるで無数の『蝶』のように、全天のあらゆる方向から植物へと向かって、ひらひらと舞い飛んできているのです。」

（全集第98巻『自然霊と精神的存在。私たちの目に見える世界におけるその実効性』）

〈1908年〉

【蛹化、およびその基礎にある幾何学と算術】

1月23日

「たとえば昆虫が蛹になるときに現れるような微細なプロセスに深く入り込んでみる。そこでは、一本一本の糸が特定の線や方向に向けて紡がれていき、一つの方向からまた次の方向へと紡がれていく。そのとき、人間が長い長い修業期間を経てようやく発達させるような幾何学や算術に似た何かが、その動物の営みの中で展開しているのを見ることができる。……まさに私たちは、このような昆虫、すなわち毛虫が繭を作って蛹にこもるとき、ある種の学問的研究方法に対峙するような知性が立ち現れるのを目にするのである。」

（GA 56『魂と精神の認識』）

【神話の扱い方の象徴としての蝶】

9月12日

「いま私たちは、かつてイニシエートがエジプト人に明確に示したイメージの全体像を捉えようとしている。すなわち、『自我に目覚めた人間は、地上の肉体に縛り付けられた』というイメージである。……これこそが、エジプトで弟子に与えられ、のちにギリシャへと渡って『プロメテウス神話』となったイメージにほかならない。このような神話は、粗暴な手で扱ってはならない。私たちは、そのようなイメージから、まるで蝶の翅から鱗粉を剥ぎ取るようなことをしてはならない。私たちは翅の鱗粉をそのままにしておかねばならないし、花びらの上の露をそのままにしておかねばならないのである。」

〈1909年〉

【座天使（トローネ）の営みとの比較としてのカイコ（絹糸虫）の営み】

4月13日

「このようにして、古土星が形成されるのを私たちは目にする。宇宙の周囲から世界の空間の一点へと座天使（トローネ）たちが集まり、いわば壮大なスケールで、より低い領域においてカイコが自らの肉体を紡ぎ出して絹糸にするときに行うようなことを、彼らが行うのである。座天使たちは熱物質を紡ぎ出し、それを古土星の祭壇へと捧げるのである。」

（GA 110『霊的ヒエラルキアと物理的世界におけるその反映』）

【人間の「自我」を理解するための萌芽】

日付なし

「私は私たちの友人に描かせた
昆虫の生成のプロセスを
意味深い絵の中に。
卵から、毛虫、そして蛹を経て
蝶へと至る
その神秘的な生命の連続を。
生き生きとした、純真で清らかな絵の中に、
つい今しがた若い魂が
私に明かしてくれたその絵の中に、
完全な理解のための萌芽が横たわっている。
いかにして人間の自我が
宇宙の鏡を包み込んでいるのかという、その理解の萌芽が……」

（GA 44『4つの神秘劇のための草稿、断片、および拾遺』）

〈1910年〉

【愛の網を織ること】

6月11日

「外側から運動霊、形態霊、叡智霊が織り込み、内側から意志の霊、セラフィム（熾天使）、ケルビム（智天使）が織り込んでいるこの網の内部には、本来なら外側から織り込むべきである存在たちも、やはり内側から織り込んでいます。しかし彼らは、まるで蚕が繭を紡ぐかのように、表面の下で織り動いているのです。」

（— GA 121『個々の民族魂の使命』）

〈1913年〉

【蝶のように彼女に近づいた……】

8月22日

「私は感じた、地球の重さから、空気のような軽やかさで自分を解放できるのを……自分を感じながらも、私は地球の体を、ただ関心と願いに満ちて見つめることしかできなかった。彼女へ向けて、高い世界の霊た

ちが光を放っていた。きらきらと明るく、蝶のように彼女に近づいてきたのは、彼女の生命を生き生きと育んでいた存在たちだった……」

(— GA 14 『4つの神秘劇』より「魂の目覚め」第8景、新参者の言葉)

【ゴルゴタの神秘】

10月2日

ゴルゴタの神秘（キリストの十字架刑と復活）の間に起こった日食（太陽の陰り）について語られた後、次のように続いています。

「そのような時代（日食のとき）には、普段なら非常に困難な瞑想を通じてしか到達できない事柄が、光に満ちて現れてきます。そのとき人は、すべての植物や動物を違った目で見ることになります。どの鳥も、どの蝶も、そのときは違った姿に見えるのです。そして、生命感覚の減退に気づくことになります。」

(— GA 148 『アカシャ研究より：第五福音書』)

〈1917年〉

【魂の象徴としての蝶】

5月8日

以下においてルドルフ・シュタイナーは、アリストテレスの説を引いている哲学者ヴィンツェンツ・クナウアーの言葉を引用しています。

「しかし魂、すなわちここで言う肉体を離れた人間の霊は……、アリストテレスによれば、より完全な状態にあるのではなく、むしろその本分にはそぐわない、極めて不完全な状態にある。その象徴は、よく用いられるような、蛹の殻を脱ぎ捨てて青い天空のエーテルの中で揺れている蝶などでは決してない。それはむしろ、残酷な手によって羽をもぎ取られ、今や最も哀れな虫の姿となって、這うこともままならず塵の中で蠢いている蝶に似ているのである。」

(— GA 175 『ゴルゴタの神秘を認識するための構成要素』)

〈1920年〉

【実験科学：紙粘土で作られた蝶】

2月1日

「今日でも世界の大部分がまだこの立場に立っています。つまり、実験しなければならない、器具を作って実験しなければならない、そしてその実験から自然についての見解を導き出さなければならない、という立場です。——霊的な視点からこれを見れば、次のようなことを意味します。『ここに一匹の蝶がいる。この蝶を調べるのは私には複雑すぎる。だから、紙粘土でそっくりな模造品を作り、その紙粘土の模造品を調査するのだ』と。」

(— GA 196 『人類進化における精神的・社会的変革』)

【古代の人々がどのように蝶を見ていたか】

12月25日

「もう一つの側面は、古代には、地球から湧き上がり、いわば地球の流体として人間の周囲を流れ交うものを知覚する、強い内的な能力が人間に備わっていたということです。……古代の人間が植物の上を飛んでいく蝶を見たとき、彼らは常に、蝶たちが地球から創り出されたものを自らの後ろに引き連れて飛んでいるのを見ていました。オーラのような雲の中に、地球の上をさっとかすめていく霊的な本質を彼らは知覚していたのです。」

(— GA 202『世界の精神性と人間の肉体的なものとの架け橋』)

〈1921年〉

【昆虫と1年の歩み（季節の巡り）】

1月2日

「昆虫の生活とその変態において、私たちは、昆虫が次々ととっていく形態の中に、1年の歩み（季節の巡り）が直接表現されているのを目にするのです。」

(— GA 323『様々な自然科学領域と天文学との関係』)

【動物の形態は何によって説明されるべきか】

6月26日

「普段なら入眠から目覚めまでの間に無意識に経験されているあの状態を、意識的に通過するときにはまず経験されること——私たちのリズムの源泉であるこの世界へと没入することによってそこで経験されること——それは、動物界の様々な形態が理解できるようになるということです。動物界の形態は、外部の物理的な基礎や力から説明することはできません。動物学者や形態学者が、ライオンの形、トラの形、蝶の形、甲虫の形を、この物理的空間に見出される何らかのものから説明できると考えているなら、彼らは大いに誤解しています。動物の形態を説明する根拠となるものは、この物理的空間に見出されるいかなるものからも説明できないのです。まさに私が今述べたような方法で、私たちが第3の法則性、すなわち『宇宙魂』の法則性の中へと入っていくときに、それは見出されるのです。」

(— GA 205『人間の生成、宇宙魂、そして宇宙霊』)

【人間の「自我」が生きている世界の象徴としての昆虫】

7月16日

「皆さんの周りを飛び回っている昆虫たちを見て、それらをイマジネーションによって捉えるとき、皆さんはその中に、自分自身の『自我』が生きている世界の象徴を得ることになります。試みに、自分の周囲を昆虫たちが飛び回っているのを想像してみてください。甲虫、ハエ、美しい蝶、醜いアブやマルハナバチ、その他あらゆるものです。皆さんの周囲を実に様々な軌道を描いて浮遊しているこれらすべてを思い浮かべてみてください。そこには、皆さんの自我が実際にその内部で生きている世界が、外面的に目に見える形で現

れているのです。……私たちは、鳥の体の羽の中に定着しているもの、そして蝶や昆虫一般の中でひらひらと飛び回っているものの中に、自らの自我をもって、私たちの運動への知覚と参与を体験しているのです。」

(— GA 205『人間の生成、宇宙魂、そして宇宙霊』)

〈1923年〉

【昆虫の「知性」について】

1月5日

「まさに昆虫においてこそ、この知性の働きを観察しなければなりません。なぜなら昆虫の場合、彼らが賢いのは『大きな脳を持っているからではない』ということが、はっきりと分かるからです。彼らがそんな脳を持っていないのは確実ですから。だからこそ、まさに昆虫においてこれを観察せねばならないのです。……昆虫はみな卵を産みますが、そこからすぐに親と同じ形の動物が出てくるわけではなく、必ずまずあのような蛆が出てきて、それが変態していきます。昆虫の一種である蝶においては、それはさらに複雑です。そこではまず蛆、すなわち毛虫が出てきて、それが蛹になり、その蛹からようやく蝶が出てきます。そこには完全に一つの変態が存在しているのです。しかしこの変態は、本質的にすべての昆虫に存在します。さて、成長するとベジタリアンになり、植物しか食べなくなる昆虫がいます。……しかし奇妙なことに、彼らの幼虫や蛆は、卵から這い出てきたときには他者の肉を必要とするのです。……この這い出てきたばかりの蛆たちは、実はすでに恐ろしいほどに賢いのです。……このことから、昆虫のような動物について次のように言えることがお分かりでしょう。彼ら自身は決して悟性など持っていません。なぜなら彼らには悟性のための器官がなく、脳など欠いているからです。しかし、彼らが行うその行為の中には、知性が働いているのです。」

(— GA 348『健康と病気について：精神科学的感覚論の基礎』)

【歴史的エポックにおける人間の生涯と昆虫の生涯の比較】

2月2日

「ある動物の生涯を、たとえば1年の歩み(季節の巡り)の中で観察すると、その動物がある意味で1年の歩みを共に体験していることが分かります。たとえば、季節の移り変わりに関連して蛹になり、別の時期に蝶として這い出し、さらに別の季節に卵を産み落とす、といった昆虫を思い浮かべてみてください。私たちは外的な自然の歩みを追うことができ、そのような昆虫の生涯の歩みも追うことができます。そうすると、そこにはある種の結びつきが見出されます。いわば、その動物は自らの生活において、周囲の自然環境に順応していると言えるような結びつきです。地球進化の古い時代における、ある人間集団、あるいはより大きな人間共同体の人間を観察すると、彼らもまた、多かれ少なかれ本能的に、この外的な自然を共に体験していたことが分かります……」

(— GA 221『地球の存在と天上の認識』)

【凍りゆく水を動かすことで生じる動物形態の体験に基づいた、人間形態の体験について】

4月7日

「大晦日の夜に行われる「大みそかの蠟占い」は、かつて人間が自然の中で発揮していた、素晴らしい内的な原動力の最後の抽象的な名残です。その原動力は、例えば私が説明したような形で現れていました。かつて人間は、すでに凍りつつある水の中に手を差し入れ、その手をかじかませながら、水をどのように波立たせて形作るかを試しました。すると、凍りゆく水が結晶や造形をなしてそれに応えたのです。人間はこうにして、地球への問いかけを行っていました。真冬の時期、人間は自分が今知りたいと思うことのために、天空へと目を向けるのではなく、地球的な四大元素の水へと目を向け、その地球的エレメントがどのような形態をとり得るかを試したのです。そしてこれを通して、そこで現れてきた様々な形態が、甲虫や蝶が形作る形態とある意味でよく似た振る舞いをしていることに気づいたのです。

(—— GA 223『地球の呼吸作用としての1年の巡りと4つの大きな祝祭の時期』)

【蝶の本質】

10月8日

「自然のあらゆる場所に精神（霊）が存在しています。蝶の飛行から出発する、飛行のメカニズムの探求。蝶は非常に複雑な方法で成り立っています。すなわち、卵、毛虫、蛹、そして成虫（蝶）という段階です。卵には常に、少量の塩分を含んだ水分が必要です。毛虫は絶えず光の中で生きています。蛹は物理的な地球の力から完全に身を遮断します。そして蝶はただ光にのみ従い、もはや重力に支配されません。「自我（」と蝶の世界の結びつき。

(—— GA 351『人間と世界：自然における精神の働き／ミツバチの本質について』)

【宇宙の芸術的創造：蝶の例を通して描かれるもの】

10月15日

「皆さんは、蝶が卵を産み、毛虫が這い出て、その毛虫が糸を紡いで蛹化のために繭を作り、そして蛹から蝶が飛び立つのを見えています。これらの事柄は現代の科学でも記述されますが、しかし、どのような形で記述されているのでしょうか！そこに本来根底にある、あの素晴らしい神秘への意識が全くない状態で記述されているのです。

蝶は卵を産みます。この卵に関してまず重要なのは、それが適切な季節に産み落とされ、自然の連関の中で『地球的なもの』、すなわち固形のものや、固形と液体の間にあるものとして作用するすべてに対して、とりわけ受容的になるということです。卵の発育にとって、塩分を含んだものは何よりも不可欠なものです。

そして、地球的なものに加えて『流動的なもの』が、そして流動的なものと共に『エーテル的なもの』が優勢になる時期がやってきます。エーテル的なものによって貫かれた流動的なものは、卵から這い出る毛虫の形成へと移行します。卵があるとき、私たちは好んで『物質的なものを伴った地球』を思い浮かべます。しかし卵から毛虫が這い出て、その形態を目にすると、それこそが、エーテルに貫かれた『流動的なもの、水的な存在』として卵から引き出されたものであり、毛虫を毛虫たらしめているもののなのです。

さて、毛虫はその本質を空気の中で発展させなければなりません。ここで毛虫にとって最も重要なのは、毛虫が今や『光』と結びつくということです。それにより毛虫は、実際には光に貫かれた空気の中で生きるようになりますが、同時にそれによって『アストラル的なもの』との内的な関係を体験し、このアストラル性との関係によって光を吸収するのです。毛虫にとって本質的なのは、毛虫がその感覚システムを通じて、太陽の光線、すなわち光を放つ太陽に身を晒しているという点です。

そして今、毛虫に一つの衝動が生じます。皆さんが夜、部屋に横たわっていて、まだ明かりが灯っているときに、蛾がその光に向かって飛んでいくのを最も極端な形で目にするでしょう。そこには、自分自身を放棄し、自分を捧げようとする衝動、すなわち蛾においては説明のつかない衝動があるのです。その理由はのちほどお話しします。蛾は光の中に身を投じて焼け死んでしまいます。光を放つ光に対して、毛虫も全く同じ衝動を抱いているのです。しかし毛虫は、太陽の中に身を投じることができないように組織されています。蛾は光の中に身を投じることができますが、毛虫は光への自己捧献の同じ衝動を持ちながらも、それができません。太陽はかなり遠くにあるからです。

毛虫はこの衝動を発展させ、自分自身から外へと出ていき、光を放つ光の中へと入り込んでいき、自分自身を捧げます。毛虫は自分の体から物質的な素材を、太陽光線の中へと紡ぎ出していくのです。毛虫は太陽光線の中へと自らを犠牲です。毛虫は昼の間、太陽光線の方向に向けて自分の外殻、すなわち蛹の殻を紡ぎます。そして夜に休息するとき、それが再び凝固します。こうして昼と夜のリズムから、これらの糸が紡ぎ出されるのです。これらの糸は、物質化され、紡ぎ出された『光』そのもののなのです。

光が形成し、自らが物質化させたその糸から、毛虫は自分の蛹の殻を紡ぎ、その中に溶け込んでいきます。光そのものが、蛹の殻が紡がれるきっかけとなっているのです。毛虫は光の中に飛び込むことはできませんが、自らを捧げ、光が閉じ込められる『小部屋』を創り出します。そして、根源的な知恵による形態の法則によって、宇宙から蛹の殻へと働きかけが行われます。毛虫が光のための密閉された小部屋を用意したのちに、そこから蝶が形作られて飛び出してくるのです。

ここに、蝶の卵から、すべての色が光から生まれるように光から生まれ出た、色彩にきらめく蝶に至るまでの全プロセスがあります。この全プロセスは、宇宙から生み出されたもののなのです。

もし、このように「卵、毛虫、蛹、蝶」という4つの構成要素へと展開するプロセスが、何らかの形で押し縮められると、全体が変化します。このプロセスが動物の内部で行われる場合、最終的に光から創り出される霊的な美や形が、その動物の中に留まることになります。

ご覧の通り、私たちがこの事柄の本質へと入り込むには、そのプロセスを『芸術的に思い描く』以外に方法はありません。蛹の繭から、光から生まれ出た蝶が形作られていくときに生じるプロセスを、芸術的以外の方法で思い描くことは不可能なのです。そのプロセスを現実 に即して、事実 に即して思い描くとき、人間は驚くほど芸術的な領域へと入り込むことになります。

このような方法である事柄を知るとき、自分がどれほど全く異なる意識を得るか、一度試してみてください。それは、現代の物質主義的な方法で何かを知る——それは本来『無知』に等しいのですが——のとは、全く異なる意識です。人間が自らの魂と肉体の全体をもって、宇宙の芸術的創造と一つに溶け合うとき、あらゆる個々の事象が、極めて興味深いものへと変わるのです。」

(—— GA 302a『人間認識に基づく教育と授業』)

【いわゆる「蝶のサイクル」より】

10月19日

蝶の変態——「卵、毛虫（幼虫）、蛹、蝶（成虫）」。この同じプロセスを霊視的に見ると、次のようになります。

「人は、蝶という存在が、いわば『頭部の機能』の延長線を示しているのだということに気づきます。頭部の力が、ある意味で人間全体へと拡張されたものが蝶なのです。……私が何かを知覚したとき、私の内部で一つの思考を引き起こし、それを内奥へと押し下げるというプロセスは、まるで蝶が卵を産み落とすかのようです。……そして、エーテル体における生命は、霊的な光へと自らを捧げ、いわば思考の周囲を内的なアストラル的の繭の織物で包み込みます。すると、そこから『記憶』が孵化してくるのです。

もし私たちが、その瞬間に浮かぶ『現在の思考』の中に鳥の羽毛を見るならば、私たちの『記憶の中の思考』の中には、霊的な方法によって生じせしめられた、色彩にきらめく蝶の翅を見なければなりません。」

(— GA 230 『創造し、形成し、形づくる宇宙の言語の協和音としての人間』第1講)

【蝶と光】

10月24日

「よく見てごらんさい。そこに卵が、むき出しのまま置かれています。毛虫が這い出てくると、そこにはすでに光が届いています。毛虫は……光の方へと進み、光に合わせて、自分が蛹になるための外殻である繭を紡ぎます。そして光が、今度はそこから再び蝶を呼び出すのです。光は休むことも憩うこともなく、蝶にその色彩を与えます。それらの色は光によって呼び起こされたものなのです。光が蝶を扱っているのです。

そして今、人間の目には見えないもの——私たちの目はそれに対して感受性を持っていませんが——を写真に撮ったとすれば、次のようなことが証明できるでしょう。すなわち、写真に撮ると、蝶の卵は『黄色』のスペクトルを持ち、犬や牛の卵細胞は『青色』のスペクトルを持っている、ということです。……ですから、私たちは次のように言うことができます。蝶は外側の『太陽光そのもの』の中で形作られ、牛や犬は、体内に『内面化されて蓄えられた太陽光』によって形作られるのだ、と。」

(— GA 351 『人間と世界：自然における精神の働き／ミツバチの本質について』)

【いわゆる「蝶のサイクル」より II】

10月26日

昆虫界と「土星・太陽的なもの、そして空氣的なもの」との結びつきが、蝶の例を通して描かれています。

「今日、光に満ちた空気の中で、蝶の翅としてきらめいているものは、そもそも（地球進化の最初の段階である）『古土星紀』の間に最初の萌芽が形成され、それが『古太陽紀』の間にさらに発展を遂げたものです。

太陽が光を放射するという能力は、太陽自身に由来しています。しかし、その光が様々な物質の内部に、火のようなもの、きらめくものを呼び起こすという賜物は、『土星・木星・火星』の作用に由来しています。ですから、本来、蝶の本質を地球の上で探そうとする者は、蝶の性質を理解することはできません。蝶の性質における力、すなわち実際に作用している力を、私たちは宇宙に探さねばならず、太陽、火星、木星、土星に求めなければならないのです。」

—— 人間の「記憶」の宇宙的な具現化としての蝶の進化。—— 蝶の卵は「太陽」の、毛虫は「火星」の、繭（蛹）は「木星」の、成虫（蝶）は「土星」の、それぞれの影響下にあります。—— 「空気の中へと高められた植物」としての蝶。

「植物とは——地球によって縛りつけられた蝶である！蝶とは——宇宙によって地球から解放された植物である！」

(GA 230『創造し、形成し、形づくる宇宙言語の協和音としての人間』第4講)

【いわゆる「蝶のサイクル」より III】

10月27日

蝶の本質は、宇宙の高次の領域を見上げて初めて理解することができます。

「これら宇宙の高次の領域は、地球に蝶という存在を贈り届け、蝶の存在をもって地球に恵みを与えているのです。」

—— 蝶の色彩に現れている「土星」の働き。

「蝶は、地球の物質をまるで最も微細な鱗粉のようにしてのみ自らに取り込みます。……いわば、あらゆる地球的なものから最も微細なものだけを抽出して、それを完全な霊化へと至らせるのです。」

—— 子供たちにおいて、「空気の中をひらひらと飛び回る、この霊的なものへの喜び」が育まれるべきです。

—— 鳥と蝶の違いについて。

—— 蝶にとって、地球は宇宙（コスモス）の鏡です。

「蝶は宇宙の記憶であり、鳥は宇宙の思考であり、コウモリは宇宙の夢なのです。」

(GA 230『創造し、形成し、形づくる宇宙言語の協和音としての人間』第5講)

【いわゆる「蝶のサイクル」より IV】

10月28日

人間の頭部の形成と同時に、古土星紀の間に、蝶の本質にいたる萌芽が誕生しました。

「あなた自身の『頭部の神秘』を知るためには、外なる自然の中で蝶がいかにして生成されるかという『蝶の神秘』を研究しなさい。——これこそが、霊視的な観察に対して宇宙が与えてくれる偉大な教えなのです。」

—— 上層の宇宙（マクロコスモス）の「美」の鏡像としての蝶。

—— 光の存在としての蝶。

「蝶や鳥たちの中に、私たちは、人間がこの地球へ降りてくる前にともに生きていた、あの『霊的な形態』、すなわち高次のヒエラルキアの存在たちを思い起こさせる何かを見出すのです。」

—— 蝶は、霊化された地球の物質を、絶えず宇宙へと送り届けています（蝶のコロナ）。

「地球は、この『蝶のコロナ』の輝かしい放射と、『鳥のコロナ』の放射を宇宙空間へと送り出すことによって、ある意味で、人間に死後の世界から再び肉体を持って転生してくるよう呼びかけているのです。」

—— 他の生物との比較における蝶、および進化の内部におけるその意義。

(GA 230『創造し、形成し、形づくる宇宙言語の協和音しての人間』第6講)

【いわゆる「蝶のサイクル」よりV】

11月2日

植物界と蝶の世界との関連について。エレメンタル（自然霊）。火の精霊たちは、蝶の世界と自らが深く結びついていると感じています。

「まさに、炎において光を輝かせるのがまず熱であるのと同じように、地球の表面において、昆虫たちが世界の宇宙空間へと光をきらめかせるとき、人間が肉体を持って誕生するために降りてこようとする際に、人間を惹きつけるのはまさにその光なのです。それは昆虫たちであり、宇宙によって、彼らの周囲を飛び交う火の精霊たちによって、これらの行為へと燃え立たされた存在たちなのです。」

(GA 230『創造し、形成し、形づくる宇宙言語の協和音しての人間』第7講)

【いわゆる「蝶のサイクル」よりVI】

11月3日

火の精霊たちは、はかない蝶の性質を補完する存在です。

「一方に物理的な蝶がいて、それを相応に大きく拡大して想像し、もう一方に火の存在を思い浮かべるとします……。これら二つを一つに合わせると、実は羽の生えた人間、本当に羽の生えた人間のようなものができあがる、という感覚を抱くのです。」

「もし……火の存在たちが、蝶の領域に属し、蝶の発達にとっても役立つような衝動を自らに浸透させ、それを果実の中へと持ち下ろすと、たとえば、一連のアーモンドの木の中に『毒アーモンド』として存在するものが生まれます。この毒は、火の存在たちの活動によってアーモンドの果実の中へと運び込まれるのです。」

「人間にとって、超感覚的な世界を知ることは、すでに極めて必要なことです……。現在の発達段階にある人間は、いわば物理的な現象の中から、あのもう一つの世界を指し示す『文字』を認識していなければ、その世界へと赴くことはできません。大地の動物、水の動物、空気の動物、そして、いわば光の動物である『蝶』の中に、私たちが死と新しい誕生の間を共に生きる住人である『自然霊』を指し示すものを見出し、それを読み解くことを学んでいなければ、あのもう一つの世界へ行くことはできないのです。」

(GA 230『創造し、形成し、形づくる宇宙言語の協和音しての人間』第8講)

【いわゆる「蝶のサイクル」よりⅦ】

11月4日

火の存在（火の精霊）たちへと話を進めると、次のようなことが分かります。

「火の存在（火の精霊）たちへと移るなら……、蝶が死んでいくとき、その羽から落ちる『蝶の鱗粉（粉）』が、一見すると跡形もなく消え去ってしまうように見える様子を、ぜひ一度思い浮かべてみてください……。あの蝶の羽から粉となって落ちるものは、最高度に靈化された物質なのです。そのすべてが、地球を取り巻く熱エーテルの中へと、まるで小さな彗星のように流れ込んでいきます。鱗粉の粒の一つひとつが、地球の熱エーテルの中で、まるで小さな彗星のようになるのです。

一年の経過の中で蝶の世界がその終わりを迎えるとき、すべてはきらめき、かすかに光を放ちます。それは内なるきらめき、内なる微光です。そして、このきらめきと微光の中に火の存在たちが流れ込み、それを自らの中に受け入れます。それは彼らの中でさらにきらめき、かすかに光り続け、彼らの中にもまた、ある憧れ（切望）が生まれるのです。彼らはそのようにして受け入れたものを、高みへと運び上げます。

すると――以前、別の側面から皆さまにお話ししたように――蝶の羽から生じ、火の存在たちによって外へと運ばれたものが、宇宙空間へと光をきらめかせているのが見えます。しかし、それはただきらめいているだけでなく、外へと流れ出ているのです。そしてそれこそが、高次の階層（ヒエラルキア）の霊たちから見た、地球の本来の姿をもたらすものなのです……。そしてまた、蝶という存在が減びていくことは、いわば常に地球を一つの『火の器（燃え盛る鉢）』のように包み込んでいるものなのです。」

（GA 230『創造し、形成し、形づくる宇宙言語の協和音としての人間』第9講）

【自然を理解することを学ぶ】

11月30日

自然の営みを真に理解することについて、次のように語られています。

「いわば、知識を習得する技術をある程度心得ている者なら、種まきや収穫、そしてそれに伴って起こるあらゆる事柄に携わっている農夫の、何気ない素朴な発言が、時にはどれほど凄まじい光をもたらしてくれるかを知っています。

皆さまは『そうは言っても、その農夫自身はそれを理解していないではないか』と言うかもしれません。しかし、それを語る本人が理解しているかどうかは、皆さまが気にする必要のないことです。皆さまが彼の言葉に耳を傾けると、皆さまの側がそれを理解しさえすればよいのです。大切なのはその点にあります。

確かに、その言葉を発している本人がそれを理解しているケースはごく稀であり、それは一種の直感によるものです。そして、それ以上に徹底した事柄を、私たちは、自分たちが語っていることを全く理解していない存在たちから学ぶことができます。つまり、甲虫（カブトムシやコガネムシなど）や蝶、鳥たちといった存在から学ぶことができるのです。」

（GA 232『神秘劇の諸形態』）

〈1924年〉

【昆虫と幼虫、そしてそれらと樹木との関連について】

6月15日

自然界における鳥や昆虫の役割と、農業におけるその重要性について、次のように語られています。

「あるとき、昆虫たちはこう言いました。『私たちは、樹木の周囲に飛び散っているアストラル性を正しく処理するほど、自分たちが十分に強くはないと感じている。だから私たちは、他の植物たちが持つ「樹木のようにになりたいという欲求」を利用して、それらの植物の周囲を飛び回り、樹木を取り巻くアストラル性については、主にあなたがた鳥たちに委ねることにする』と。

このようにして自然界では、鳥という存在と蝶という存在の間で、見事な分業体制が敷かれました。そしてこの両者が一体となることで、この飛翔する生き物たちは、地球の表面や空気の中でアストラル性が必要とされるあらゆる場所に、それを極めて素晴らしい形で、正しく行き渡らせるように作用しているのです……。

それゆえ、農業においても、正しい方法で昆虫や鳥たちを飛び回らせることに目を向けなければなりません。農業を営む者自身も、昆虫の飼育や鳥の飼育について、ある程度理解している必要があるのです。」

（GA 327『農業講座』）

以下もあわせてご参照ください。

『秘教学校の認識・儀礼部門の歴史と内容より 1904年～1914年』（GA 265）に収められている、いわゆる「蝶の瞑想」、ならびに、定期刊行物『ルドルフ・シュタイナー全集への寄稿（Beiträge）』第40号（1972年クリスマス）に掲載された、連続講義『創造し、形成し、形づくる宇宙言語の協和音としての人間』（GA 230）に関するルドルフ・シュタイナーのノートへの書き込み（覚書）。

●魂の不死の象徴としての蝶に関するルドルフ・シュタイナーの発言

〈1906年〉

5月14日

「死と誕生についての問いも、具体例を用いることで、よりいっそう上手く答えることができます。自然を例に引くことができる人なら、それによってまさに何をもちたすことができるかが分かるはずです。

たとえば子どもに毛虫を見せて、その毛虫がどのように繭を紡いで蛹になり、そしてその蛹から最終的にどのように蝶が展開していくのかを示してあげるのです。これこそが、母親から子どもが誕生することを示す、大変素晴らしい具体例なのです。」

（GA 96『精神科学の根源的衝動』）

8月27日

「子どもが生と死について、あるいは人間の変容について尋ねてきたときには、毛虫と蛹の例を見せてあげることができます。そうして、いわば蛹の中から蝶が新しい生命へとよみがえる様子を、子どもに分かりやすく説明するのです。

自然界のあらゆる場所に、このような最高次の問いに対する比喩を見出すことができます。しかし、この時期の子どもにとって何よりも特に重要なのは、『権威（信頼できる導き手）』なのです。」

（GA 95『神智学の門前にて』）

〈1907年〉

日付なし

「たとえば、子どもに対して魂の不死について、また魂が肉体から抜け出ていくことについて語りたいとします。その場合は、たとえば蛹から蝶が抜け出ていく比喩を用いるとよいでしょう。

蝶が蛹から這い上がり、空へと舞い上がるように、死後、魂もまた肉体という器から抜け出ていくのです。」

（論文『精神科学の観点からみた子どもの教育』単行本。全集版では GA 34『ルシファー・グノーシス：人智学への基礎的論文集』に収録。）

6月28日

「もし皆さまの前に『死後生命はどうなっているのか』という問いがあるなら、子どもを蝶の蛹のもとへと連れて行ってあげるのです。そして、ただ目には見えないというだけで、蝶が蛹から飛び立つように、魂もまた肉体から飛び立つということを教えてあげてください。

しかし、このことを確信を持って子どもに伝えることができるのは、自身がそれを信じており、自分にとって『蛹から蝶が出てくること』が、低い段階において、より高い段階で『魂に起こること』とまったく同じ現象である、と捉えている人だけなのです。」

（GA 100『人類の発展とキリスト認識』）

〈1909年〉

6月7日

「その際、子どもからの問いにどのように答えるかということが、極めて大きな意味を持ちます。たとえば、人間のなりたちや、死と誕生についての説明として、蛹から蝶が生まれるプロセスを用いることです。

これは、物理的な肉体から外へと這い出ようとする、人間の『魂としての性質』を示す一つのイメージなのです……。秘教探究者は、この『蝶と蛹のイメージ』こそが、はるかに高次のプロセスのシンボルとして役立つものであることを知っています。」

（GA 109/111『精神的経済の原理』）

〈1918年〉

4月29日

「しかし、精神科学（人智学）の立場に立つ者なら、蝶こそが、宇宙霊によって創り出された『不死の真の姿』であることを知っています。

私たち自身がこのイメージを信じているのであり、私たちが子どもへ教えるために選ぶのは、自分自身が信じているものにほかなりません……。そうすることによって、私たちは現実の中へと没入しようとし、思考の中にまだ抽象的なものを求めてしまう『利己主義』を克服しようとするのです。」

（GA 182『生の変容としての死』）

〈1919年〉

6月15日

「子どもに対して、昆虫の蛹からどのように蝶が飛び立っていくのかを示し、それとまったく同じように……人間の魂もまた死の門をくぐり抜けていくのだということを教えてあげます。

……私はそのことを信じています。なぜなら、それは実際に真実だからです。精神的な世界において不滅の魂が人生から死の門を抜けて現れ出ると、まったく同じ法則に従って、物理的な世界においても蛹から蝶が現れ出ているのです。」

「一つの魂がもう一つの魂へと自由に自らを捧げることは、何かから発展していかなければなりません。それはまず、『権威に対する信頼の念』を通じた献身の中から、自らを解き放ち、這い出していかなければならないのです。

私たちが子どもの頃にまず権威に対する感情を通り抜けるということ。これこそが、人生におけるあらゆる『社会的な愛』にとっての『蛹の準備期間』なのです。」

（GA 192『社会的・教育的問いへの精神科学的アプローチ』）

8月11日

「その秘密は、語る大人の側が自分自身でそのイメージを信じているときにのみ、子どもがそのイメージから本当に心を動かされる（掴まれる）、という点にあります。

そして、まさに本物の『精神科学的な心のあり方』こそが、私たちを再びそこへと連れ戻してくれるはずです。つまり、現代の自然科学が私たちに語るような、魂の抜けた事象を自然界に見るのではなく、自然の中に再び『イメージ』や『想像力に満ちたもの』を見るようになるのです。

蛹から這い出て、蝶として目の前に存在するものは、神聖なる宇宙の秩序によって、自然の秩序の中へと組み込まれた『魂の不死を示す真のイメージ』にほかなりません。もし不滅の魂というものが存在しなかったならば、蛹から這い出てくるあの蝶という存在も、この世には存在しなかったでしょう。」

（GA 296『社会的問題としての教育問題』）

8月21日

「14歳になる前の子どもに対して、いかなる種類の抽象的な概念を用いても、不死について何かを理解させることはできません。しかし、子どもに次のように言ってあげることはできます。『この蝶の蛹を見てごらん。中にはもう何も入っていないね。ここに蝶が入っていたけれど、外へと這い出ていったんだよ』と。

子どもにそのプロセスを実際に見せてあげることもできますし、このような『変態』の様子を子どもに提示することは大変良いことです。そこから、次のような比喻を引くことができます。『考えてごらん、今のあなた自身も、そのような一つの蛹なんだよ。あなたの中に魂があつて、それは後になって外へと抜け出ていくんだ。ちょうど蛹から蝶が抜け出ていくようにね』と。

……これは単なる……比喻ではなく、神聖なる宇宙の秩序によって、そこに配置された一つの厳然たる事実なのです。」

(GA 294『教育芸術：方法論・指導法』)

9月7日

「蛹と蝶というイメージが、外側から都合よく継ぎ合わされた単なる比喻ではなく、神聖なる霊的な自然そのものが私たちの前に配置してくれた本物の比喻である、と実感できるようになって初めて——つまり、子どもがそれを信じるべきであるのと同じように、私たち大人自身がそのイメージの真実性を信じることができるようになったその瞬間に初めて——私たちは生き生きとした霊を子どもへと伝えることに成功するので

私たちは、真理の精神（霊）の中から語り、そこから働きかけることができなければなりません。」

(GA 298『ヴァルドルフ学校におけるルドルフ・シュタイナー』)

9月26日

「それに対して教育において至る所で重要になるのは、自然を通じて超感覚的な世界を指し示すような『表象』を私たちが形成していくことです……。

しかし、そのような表象が効果を発揮するのは、皆さまご自身がそれを信じている場合だけです。つまり、蛹から蝶が這い出てくるという表象が、皆さま自身にとって、神聖なる諸力によって自然の中へと植え付けられた『魂の不死を示す象徴』にほかならない、と捉えられているときにのみ、それは効力を持つのです。」

(GA 300/1『自由ヴァルドルフ学校教師会議録』)

〈1920年〉

4月26日

「……子どもに対して、できるだけ早い時期から魂の不死についての感覚を育んであげるのは良いことです……。もし人が自然の神秘の中へと本当に深く分け入っていくなら、あの蝶の蛹から飛び立つものこそ

が、創造主自身によって自然の中へと配置された『魂の不死を示す象徴』そのものである、ということが自ずと分かってくるはずです。」

(GA 301『精神科学による教育・指導芸術の刷新』)

〈1921年〉

2月27日

「たとえば、子どもに対して素朴な宗教的表象、たとえば魂の不死についての表象を育んであげたいとします。

もしこのことを、子どもが9歳や10歳になる前に教えてあげたいのであれば、私たちはイメージから出発してそれを形作っていくことができます。私たちは子どもに次のように言ってあげなければなりません。

『この蝶の蛹を見てごらん。包んでいた殻が破れて、蝶が空気の中へとひらひらと飛び出していくだろう。人間もそれとまったく同じなんだよ。不滅の魂は物理的な肉体の中に住んでいるんだ。死はその肉体を壊してしまう。不滅の魂はあの蝶に例えることができるけれど、ただ目には見えないというだけで、蝶が蛹から空気の中へと飛び立つように、魂もまた物理的な肉体から霊的な世界へと飛び立っていくんだよ』と。」

(GA 304『人智学の基礎における教育および指導方法』)

3月20日

「自然そのものが、蛹から蝶が現れ出るという現象において、より低い段階で表現しているのは、より高い段階において魂にとっての『不死』にほかならないものなのです。」

(GA 217a『青年の認識課題』)

11月11日

「もし私が……人智学的精神科学によって世界の普遍的な本質について学び、あらゆる物質の中に霊があるということを知っているならば、私は『自分はものすごく賢くて、子どもはものすごく無知だから、何か分かりやすいたとえ話でも)えてやらなければならない』などとは決して言いません。

そうではなく、高次の段階において肉体から現れ出る魂が、より低い段階においては自然の法則性を通じて、蛹から這い出てくる蝶の姿として目の前に配置されているのだ、ということを私自身が信じているのです。

私は、自分自身が用いる比喩を自ら信じています。それは私にとって『聖なる確信』なのです。この二つ(頭で考え出した嘘のたとえ話と、聖なる確信から語る本物の比喩)は全く異なるものです。

もし私が聖なる確信から子どもに語りかけるなら、私は、言葉には表せない方法で、子どもの最も内なる部分へと触れることになります。そこで私は、子どもたちの中に、生き生きとした感情、生き生きとした概念を呼び起こすことができるのです……。」

(GA 304『人智学の基礎における教育および指導方法』)

11月23日

「私が自分の理性を使ってこのイメージを作り出しているのではなく、世界そのものが、蛹から這い出てくる蝶という存在において、自然の営み（真の姿）を私たちの前に提示してくれているのです……。」

（GA 304『人智学の基礎における教育および指導方法』）

12月31日

「たとえば、子どもに対して……魂の不死についての表象を育んであげたいとします。

子どもが、教育における『芸術的なもの』をとりわけ受け入れる素質を持っている年齢（第2七年期）においては、抽象的な概念を使ってそのような事柄を子どもに伝えることはできません。私たちは、イメージを伴う方法でそれを伝えなければならないのです……。

蛹と蝶に実際に起こっていることは、私が頭で考え出したことではなく、根源の叡智によって、あらかじめ創造の中に組み込まれているものなのです……。

私自身がこのイメージに対して抱いている信仰の温かさと真摯さから、それを子どもへと教えてあげるなら、その教えは子どもの中に残り、人間全体のあり方の中へと形作られていきます。

私たちは、このような方法の中に、ごく自然な『権威』の働きを見出すことができます。そうして初めて、この権威というものの、すなわち心からの最も内なる従順へと子どもを導くことが、まさに健康的で有益な効果をもたらすものであると見通せるようになるのであり、誤った『自由の原則』の立場から非難されるようなこともなくなるのです。」

（GA 303『人間本性の健全な発達』）

〈1922年〉

8月17日

「……蝶の蛹から蝶が飛び立つように、死が訪れるとき、魂もまた肉体から飛び立ちます。ただ、蝶は目に見えますが、魂は目に見えないというだけなのです……。」

（GA 305『教育芸術の精神的・霊的根源力』）

11月11日

「さて、皆さまは私に次のように尋ねるでしょう。『では、歯の生え変わり（7歳頃）から性成熟（14歳頃）までの間に、子どもに命令を与えたり理性に訴えかけたりするのではなく、道徳的・感情的な判断力を植え付けるように教育しなければならないとしたら、一体何に訴えかければよいのですか？』と。

……それこそが、教育者と子どもの間に『目に見えない計量不可能なもの』をもたらす、あの『権威による信頼関係』なのです！このことを、今から一つの例を挙げて分かりやすく説明しましょう。

私は、人間の魂という存在の不死について、科学的な事柄によってではなく、イメーを通じて子どもに伝えてあげることができます。私は自然と霊を一つに織り合わせ、おそらく芸術的なイメージの形にして、子

どもに次のように語りかけるのです。『見てごらん、ここに蝶の蛹があるね。蝶が蛹の中から這い出てくるよ……』と。」

(GA 218『人間の有機体形成における精神的関連』)

11月20日

「魂の不死は、より単純で原始的な段階において、蛹から這い出てくる蝶の姿となって私の前に現れてくれます。神ご自身が、あの這い出てくる蝶を通して、私にそのことを示そうとされたのです。」

私たちがこのようにして、自分が用いるイメージに対して自ら確信を深めることができ初めて、私と子どもとの間に、あの独特な、目に見えない霊的な交流が繰り広げられることになるのです……。」

(GA 218『人間の有機体形成における精神的関連』)

〈1923年〉

4月19日

「頭の中で比喩を行っているのではなく、宇宙の秩序のものがこのイメージを配置してくれたのです。蛹から蝶が這い出てくるという現象の中には、より高い段階において魂の不死の中に存在しているものとまったく同じ事象が、より低い段階において、実際に表現され、感覚的に捉えられる形となって目の前に存在しているのです……。」

(GA 306『精神科学的人間認識の観点からみた教育実践』)